

でかいくしゃみをして涼介親父がはねあがった。とたんに――。

「ピッピロピー！」

電子音が鳴りひびいた。

「ど、どうだっ」

親父は鼻をすすりあげ、マスクの向こうから情けない叫びをあげた。ヤクモノのチューリップが開きつばなしになり、赤いランプが点滅し始める。たちまち受け皿をいっぱいにした玉に、親父は目を細めた。

店員が大箱を手を走ってくる、またか、という表情で親父をにらんだ。

それも道理。なんと今日五台目の打ち止めなのだ。

「思い知ったか、リュウ。俺とおまえとではこれだけ腕に差があるのだぞ」

僕はといえば、最後の五百円をつぎこんだ台に見る見る玉が吸いこまれていくのをなす術すべもなく眺めているだけだ。

「ツキだよ、ツキ」

「腕だ。おまえには俺ほどのギャンブルのセンスはない」

「なさけねー会話」

僕は溜息をついた。たまの土曜休み、いつもは朝から麻雀にしけこむ親父が部屋にいる。わけを訊けば、いつものメンツがあらかた風邪でダウンして場が立たないというのだ。

「おまえやるか？」

の問いに、

「親子でとりあってどーすんの」

軽くないなしたリュウ君。とうの親父もガラにもなく風邪気味で、鼻をぐずぐずいわせている。ところが土曜は出前掃除婦の日で、インチキ吸血鬼に襲われかけて以来、サンタテレサアパートにいつき、今は『麻呂宇』で住みこみのウェイトレスになっている、東北の元氣娘、由香子がやってくる。

この由香子の掃除たるや強烈、窓という窓を全部開け、布団という布団をひっぺがし、服という服を全部洗濯機にほうりこむのだ。

寒風吹きぬける『冴木インヴェステイション』に親子のいる場所はない。

やむなく僕は親父は近所のパチンコ屋へと避難したというわけ。

この選択は半ば正しく、半ばまちがっていた。正しかったのは親父がバカヅキしていた

点、まちがったのはその体調を考えなかった点である。

新機種デジパチに挑戦するうちに、見る見る親父の頬が赤らみ、目がうるみ始めた。くしゃみと咳の連続。鼻は詰まり、喉は鳴らす。それでも親父は台を離れず、つぎつぎと打ち止めにしていった。

「もうやめた方がいいんじゃない。ツキを使いきると、肺炎かなにかで死んじゃうぜ」
リュウ君の忠告も馬耳東風。

「ツキではない。腕だ」

半分マスクで隠れた親父の顔は笑み崩れっぱなし。

「いい年こいてね——」

いいかけ、ザアという音に僕は振り返った。いるのだよ、こういう間抜けが。やっと打ち止めにはしたものの、せつかく稼いだ玉を箱ごとひっくりかえしてパチンコ屋の床に寄付してしまうような奴。

間抜けは、僕も顔見知りの近くの酒屋のおっさんだった。

「あーあ」

僕は呟いた。だがおっさんはぼかんと口を開けて通路の入口の方角を見やっている。ころと、はねた玉が僕の足元にもやってきた。拾ってやって、おっさんの目に気づいた。

スロットマシンよろしくハートの絵が並んだその目は、おりしもこちらにまっすぐやって

くる金髪の美女を見つめている。

紺のスカートをなびかせたワンピース姿、年齢は三十二、三の大年増だが、これがなかなかの大上玉。豪華絢爛な舞踏会が似合いそうな碧眼、抜群のプロポーションの持ち主。

外国人を多く見るこの港区でも、さすがにめつたに見かけないような美人だ。

むろんのこと、パチンコ屋に出入りする雰囲気では、まったくくない。おっさんが見とれた拍子に玉箱をひっくり返す気持もよく理解できる。

その美女がいきなり親父に抱きついた。

「リョースケ！ オオ、マイ・ダーリン！」

ときたまんだ。むせるような香水の匂いと激しいアクションに他の客もどぎもをぬかれ振り返った。

抱きつかれた親父は仰天したように女を見つめた。

「会いたかったわ！ リョースケ。私を忘れたわけじゃないでしょ」

「ちょ、ちよつと……」

「何年振りかしら？ 七年？ 八年かしら。あなたって本当に冷たい人なんだから、手紙ひとつくれないで」

あつげにとられた周囲の人々の口が、もうひと回り大きく開く。白人の美女は立て板に水の日本語を話したのだ。

「ジョーンか」

「そうよ、意地悪い人。知らぬ顔でおまけにこんなマスクで覆面ふうめんなんかして」

ジョーンと呼ばれた美女はマスクをひっぱると、鼻汁によごれた口ヒゲにもかまわず、親父の唇に唇を押しつけた。

「いったい、いつ——」

親父が問いかけた。とたんに『軍艦マーチ』が店内に流れ始めた。親父の言葉がかき消され、パクパクと金魚のように口が動く。

「ウ、リュウ！」

親父が叫んだ。気をとりなおした僕に、親父はいつぱいになった大箱を押しつけた。

「こいつを換えといてくれ!! 俺は『麻呂宇』にいる!!」

ジョーンが振り返って僕を見た。

「オー、ユア・サン!？」

涼介親父に訊ね、親父が頷くと、僕の顔はジョーンの豊満な胸に埋まっていた。九十センチは軽くクリアするバストにちがいない。

「ナイス・トウ・ミーチュウ、ボーイ。ジョーンよ」

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。